

ネットワーク上にあるコンテンツをリモコンで手軽に再生!

DiXiM マルチメディア・ホームネットワーク・スターターパック

デジオン  <http://www.digion.com/pc/pro/dixim/>

デジオンが発売したDiXiMマルチメディア・ホームネットワーク・スターターパック (DiXiM)は、動画や音楽をネットワーク経由で再生するマルチメディアプレーヤーだ。PCとPCの間だけでなく、デジタル家電とPCを接続して、相互のコンテンツを自由に楽しめる環境を構築できる。

注目されるDLNA準拠のホームAVネットワークに対応

家庭内にあるデジタル家電やPCをメーカーや機種を問わずに接続して、映像や音楽を共有する仕組み「デジタルホーム」を実現するためのホームAVネットワークのガイドラインとして、インテルやマイクロソフト、ソニーといった企業が中心となって策定したDLNAというものがある。今回紹介するDiXiMはDLNAに準拠しており、PCにインストールすることでデジタルホームに接続できる。

DLNA準拠のデジタルホームは、コンテンツを送り出すメディアサーバーと、コンテンツを受信するメディアクライアントから成

り、サーバーとクライアントの間はストリーミング形式でやりとりされる。DiXiMも、コンテンツを送り出す“DiXiM Media Server”と、受信して再生する“DiXiM Media Client”の2つのソフトがセットになっており、それぞれをPCにインストールして利用する。1台のPCに両方をインストールして、サーバーとクライアントを兼用させることも可能だ。

コンテンツのある場所を気にせずにサーバーのコンテンツを再生できる

DiXiMでコンテンツを再生するには、サーバー側で“DiXiM Media Server Tool”を起動して、公開するデータのあるフォルダーを指定する。クライアント側では“DiXiM Media Client”を起動するだけでいい。DiXiM Media Clientのメインメニューには、「ビデオ」「フォト」「ミュージック」「サーバー」という4つのアイコンが並んでいる。見たいアイコンを選択すると、同じネットワーク内のDLNA準拠のメディアサーバーが

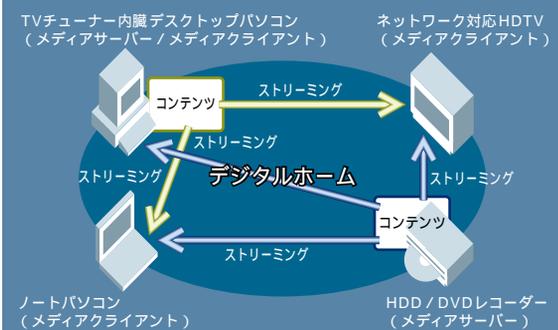
製品名	DiXiMマルチメディア・ホームネットワーク・スターター・パック
会社名	株式会社デジオン
価格(税込)	9,800円
内容	サーバーライセンス×3、クライアントライセンス×3、USB接続赤外線リモコン×1
主な仕様	対応OS: ウィンドウズXP Home Edition/ Professional、CPU、Celeron 1GHzまたはPentium III 1GHz以上、メモリ-256MB以上

持つすべてのコンテンツを横断的に検索できる。ユーザーは、どのコンテンツがどのサーバーにあるのかを気にせずに、ジャンルや日付などから目的のコンテンツにたどり着けるのだ。サーバーのアイコンを選べば、特定のサーバー内のコンテンツだけを見られることもできる。

現時点ではDLNAに準拠したデジタル家電はほとんどないため、もっぱらDiXiMをインストールしたPC同士での利用が多いだろう。しかし、2005年には多数のDLNAに準拠したデジタル家電が登場すると言われており、それを睨んでデジタルホームを先取りしたいというユーザーであれば導入してみる価値のあるソフトウェアだろう。

(笠原一輝)

DLNAに準拠したデジタルホームの構成例



パソコンとデジタルAV機器の相互接続を可能にする、DLNAに準拠したネットワーク「デジタルホーム」の構成例。どのクライアントからでも、サーバーとなるPCやHDDレコーダーに保存されたコンテンツを、どこにあるのかを気にせずに利用できる。



上はDiXiM Media Clientのメインメニュー。ビデオ、ミュージック、フォト、サーバーの各アイコンが並んでいる。リモコンでの操作を前提に離れた場所からテレビ画面を見ながらでも操作しやすい「10フィートUI」というデザインだ。下がビデオを選んだときの画面。ネットワーク上にあるすべての動画が一覧表示されている。



DiXiMマルチメディア・ホームネットワーク・スターターパックには、USB接続タイプの赤外線リモコンが付属している。DiXiM Media Clientのすべての操作が、家電製品に近い感覚で行える。

ソフトウェアのデモやオンライン教材を素速く簡単に作成!

Macromedia Captivate 日本語版

マクロメディア株式会社 URL <http://www.macromedia.com/jp/software/captivate/>

マクロメディアのソフトウェアデモ作成ツール「RoboDemo」が「Captivate」と名称を変えてバージョンアップした。ナレーションや操作説明文、インタラクティブな操作を加えたソフトウェアやウェブサイトの機能紹介デモ、トレーニング教材、オンラインのユーザーサポートツールをすばやく作成できるソフトだ。

操作手順の記録と同時にナレーションも録音

Captivateでは、まずソフトやウェブサイトの操作を「ムービー」として記録する。ムービーは操作画面数分の「スライド」で構成され、マウスの動きやファイルとフォルダのドラッグ&ドロップ、画像描画の様子などがスライド中にアニメーションで記録される。操作を記録する際のオプションは、前バージョンのRoboDemoに比べて細かく設定できるようになった。たとえば、カーソルやクリックする場所を示すクリックボックスの表示 / 非表示や、操作説

明文を自動的に挿入するかどうかなどを、ムービーの使用目的に合わせて自由に決められる。

前バージョンでは必要に応じて記録する動画のフレームレート(1秒間当たりのコマ数)を手動で切り替えなければならなかったが、Captivateでは、動きのある部分のみを自動的に1秒間30フレームのフルモーションで記録し、動きのない所ではフレームレートを低くするようになった。

操作手順を記録しながら同時にナレーションを録音することも可能になった。これも前バージョンにはなかった機能だ。記録と同時に録音すれば、後から音声を付け加えるよりも作業時間を大幅に短縮できる。

タイムラインでテキストやカーソルの表示タイミングを自在に調整

Captivateは、記録機能だけでなく編集機能も大幅に強化された。なかでも注目すべきが「タイムライン」だ。同じくマクロ

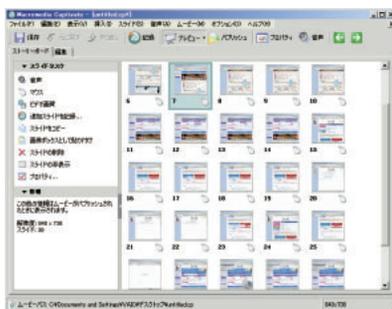
製品名	Macromedia Captivate 日本語版
会社名	マクロメディア株式会社
価格(税込)	75,600円(通常版) 29,400円(エデュケーション版) 37,800円(アップグレード版)
動作環境	対応OS:ウィンドウズ2000/XP、CPU: Intel Pentium III 600MHz以上、ブラウザ:インターネットエクスプローラ5.1以降

メディアの「Flash」や「Dreamweaver」でもおなじみの機能で、カーソルや説明文、音声などの表示 / 再生のタイミングを、マウスのドラッグ&ドロップ操作で簡単に調整して、その場でプレビューできる。これも、前バージョンにはなかった機能だ。

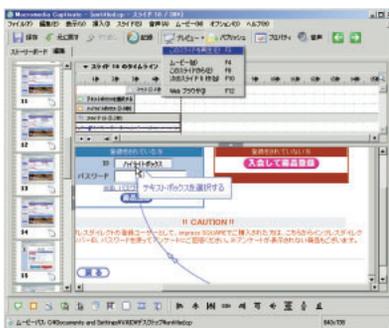
完成したムービーは、Macromedia Flash MX 2004へもエクスポートでき、より高度なFlashムービーとして編集できる。またeラーニングシステムであるBreezeサーバーへも直接アップロードできるため、ウェブ会議やプレゼンテーションでも利用できる。

単なるソフトウェアのデモンストレーションにとどまらず、オンラインサポートやeラーニングの可能性を広げてくれるソフトウェアだ。

(藪 暁彦)



操作の記録が終了すると、キャプチャーした画面を一覧表示する「ストーリーボード」が表示される。ストーリーボード上でスライドを選択し、画面左の「スライドタスク」から編集作業を選ぶ。



ストーリーボード上のスライドをダブルクリックすると、そのスライドの編集画面が表示される。編集画面では、説明文やマウスの軌跡などを編集できるほか、テキストによる解説も追加できる。また、画面上部のタイムラインでは、スライド上のオブジェクトの表示タイミングをマウス操作だけで調整できる。



編集画面のタイムライン上で音声トラックをダブルクリックすると、音声の編集画面が開く。音量の調節や、選択部分の削除、録音のやり直し、カーソル位置への無音部や別の音声の挿入などができる。MP3とWAVE形式の音声ファイルに対応している。

文書管理機能を徹底強化、起動と変換もスピードアップ!

Adobe Acrobat 7.0 Professional日本語版

アドビシステムズ  <http://www.adobe.co.jp/>

アドビシステムズからAcrobatの新しいバージョン「Adobe Acrobat 7.0日本語版」が発表された。

製品は機能の異なる「Standard」と「Professional」に、企業向けにPDFファイルの閲覧と作成に特化した「Elements」(100ライセンス以上からの販売のみ)を加えた3タイプがあり、また、Photoshop CSやGoLive CS、InDesignなどアドビ製のコンテンツ制作ツールを1つのパッケージに統合した「Creative Suite Premium」も、今後出荷されるパッケージはAcrobat 7.0 Professionalに差し替えられたものになる。

閲覧専用の「Acrobat Reader 7.0」も12月中旬から同社のウェブサイト、無償配布が始まっている。

起動時間が大幅に短縮 対応アプリケーションも増加

今回のバージョンアップでは、いくつかの大きな改良と新機能がある。

まず、一般ユーザーにとって大きいのが、アプリケーションの起動速度やPDFの変換速度が大幅に向上した点だ。使用したのはPentium 4の2.4GHz、メモリー256Mバイトのパソコンだが、定量的な値を測定して示すまでもなく、体感的にはその変化がはっきりとわかるほどの改良だ。

もう1つ大きな改良ポイントは、PDFの作成に対応するアプリケーションが増えたことだ。中でもマイクロソフトのアウトLOOKが対応したのは画期的で、複数の電子メールをまとめてPDF文書として保存できるようにもなっている。

PDFファイルの管理面では、新たに「PDFキャビネット」が搭載された。パソコン内でどんどん増えてしまうPDFファイルを統合的に管理できる機能だ。

エンタープライズ向けでは、2005年前半に発表予定のサーバー製品「Adobe LiveCycle Policy Server」を利用した、高度なセキュリティ設定とファイルへのアクセス制御が可能になっている。

また、OCRエンジン(イー・アイ・ソフト

製「読ん de!!ココ」)が搭載されたので、紙の文書を読み込ませてPDF化する際にも、文書内容を検索できるようになった。これ以外にも、ファイルを簡単に添付できる「添付タブ」機能や、ヘッダー、フッター、透かしを簡単に追加できる機能なども追加された。

すべて文書をPDF化することを目指す 複数のメールや添付ファイルもPDFに

今回は、Professionalのベータ版が入手できたので、新機能を中心にざっとテストしてみた。

まず、新機能の1つであるアウトLOOKから電子メールをPDFに変換する機能を試してみた。アウトLOOKのメニューバーにAdobe PDFメニューが、ツールバーにPDFボタンが追加されるのは、これまでのワードなどの場合と同じだ。

メッセージを選択してボタンを押すだけで、メールが丸ごとPDFファイルに変換される。添付ファイルもそのままPDFに取

Adobe Acrobat 7.0シリーズの主な機能の比較

Adobe Acrobat製品の機能	Adobe Reader 7.0	Acrobat Elements	Acrobat 7.0 Standard	Acrobat 7.0 Professional
文書チェックや校正に参加できるユーザーを制御できるPDFの作成	×	×	×	
Adobe LiveCycle Designerを使用して、インテリジェントなPDFフォームを作成(ウィンドウズのみ)	×	×	×	
技術製図のドキュメントレイヤー対応(AutoCAD、Visio)とVisioの図形データへの対応(ウィンドウズ版のみ)	×	×	×	
印刷機能のあるアプリケーションからのPDF作成	×			
アウトLOOK、インターネットエクスプローラ、アクセスからのワンボタンPDF作成(ウィンドウズ版のみ)	×	×		
AutoCAD、Visio、ProjectからのワンボタンPDF作成(ウィンドウズ版のみ)	×	×	×	
オフィスからのワンボタンPDF作成	×			
パスワード、デジタルIDによるファイルへのアクセス制限を掛ける	×			
複数のアプリケーションのデータファイルから一括変換、PDFファイルの結合	×	×		
並べ替え、フィルターツール	×	×		
PDFの閲覧、印刷、内容検索				



Acrobat Professionalのメイン画面。ツールバーにある「印」ボタンは、チェックした文書に電子印鑑を押すためのもの。「Y!」ボタンはヤフーとの提携によるウェブ検索機能のもの。

り込むことができるので、たとえば業務でのメールによる一連のやり取りを1つの文書ファイルとしてまとめて保管したり、そのままレポートとして提出したりできる。

生成されたPDFファイルにはメール単位でしおりが付けられるので、あとから内容を追いかけるのも楽だ。添付ファイルも丸ごと取り込んで、PDFファイルでも添付ファイルとして扱われるので、複数のファイルに分かれてしまうこともない。一度作成したPDFファイルに、あとからメールを追加することもできる。

また、アウトLOOK以外でも、アクセスやパブリッシャーといったアプリケーションにも、ワンクリックでPDFに変換できるボタンが追加されるようになっている。

PDFの管理をすばやくスマートに ページ単位のサムネイルも高速表示

アドビでは、このようにして各種のアプリケーションで作成したデータをPDFとして保存することで、企業における文書管理を一元化することを推進している。そうすると今度は大量にPDFファイルが発生して、管理の手間がふくらむという問題が出てくる。それを解決するための新機能が「PDFキャビネット」だ。

PDFキャビネットは、いわばPDFビューアー機能を備えたエクスプローラのようなものだ。新たに作成したPDFや、以前からパソコンに保存してあるPDFを一覧できる。いかにすばやく目的のPDFファイルにたどり着くかということを目指しており、過去に参照した時間順や、実際に保存してあるフォルダー順などで、PDFを整理してくれる。「コレクション」機能を使えば、パソコン上ではバラバラの場所に保存されているPDFファイルを目的別にまとめて管理し、すばやくアクセスできる。

また、登録されたPDFファイルは、すべてのページをサムネイルで表示できるので、内容をざっと眺めながら目的のファイルを探せる。PDFファイルのサムネイル表示という動作が重そうな印象があるが、数十ページもあるようなPDFファイルでも非常に軽快に動作する。

サーバーと連携したアクセス制御で 閲覧期間を限定したPDFを配布可能

PDFの特徴の1つである、セキュリティに関する機能も強化され、より細かくセキュリティポリシーを設定できるようになった。たとえば、閲覧、印刷、テキストのコピーなど、それぞれのアクションについて許可するかどうかを決められる。

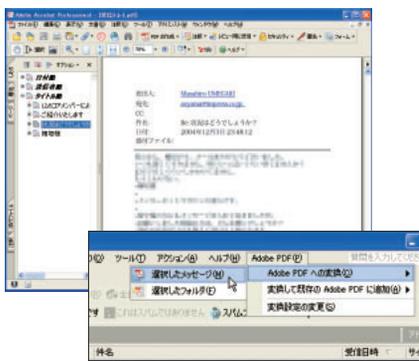
製品名	Adobe Acrobat 7.0 Professional日本語版
会社名	アドビシステムズ株式会社
価格(税込)	通常版: 57,450円、アップグレード版: 21,735円、アカデミック版: 21,735円
動作環境	Windows版: Windows 2000(SP2)/XP/128Mバイト以上のメモリー、Mac版: PowerPC G3/G4/G5のCPU、Mac OS X v.10.2.8 または 10.3、128Mバイト以上のメモリー

さらに、2005年発売予定の「Adobe LiveCycle Policy Server」と組み合わせると、期間を限定したアクセス制限を設定できるようになる。ある担当者にはファイルを初めて開いてから5日間だけ閲覧を許可するとか、ある有償コンテンツをその年の間だけは自由に閲覧できるようにするというアクセス制御が可能になる。

これによって、業務における電子文書管理の徹底や、PDFによるコンテンツのダウンロード販売などを、より安心して行えるようになる。

PDFはもはや単なる電子文書フォーマットという枠組みのものだけでなく、文書を扱うあらゆる業務の中核を担うプラットフォームになりつつある。今後は、パソコンやネットワーク上に存在するさまざまなコンテンツを管理するためのマルチプラットフォームとして、これまで以上に普及していきだろう。

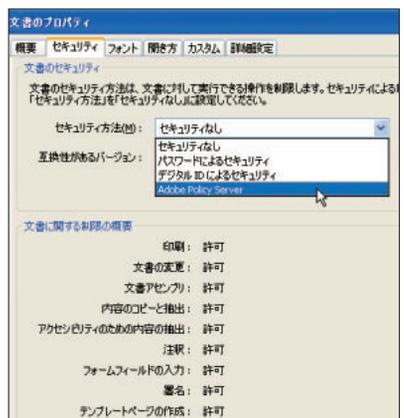
(梅垣まさひろ)



アウトLOOKで複数のメールを選択して、まとめて1つのPDFファイルにできる(下の画像)。生成されたPDFファイルは1メールごとにしおりが付けられるので管理が楽になる。添付ファイルもPDFの添付ファイルとして取り込まれる(上の画像)。



PDFキャビネットの画面。参照履歴やフォルダーとともに「コレクション」による分類が可能。真ん中の列がPDFファイルのデータで、右の列には選択したPDFファイルのサムネイルが表示される。



文書のプロパティのセキュリティ設定画面。Adobe Policy Serverを利用している場合は、より詳細なポリシーとセキュリティの設定が可能だ。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp